

加齢研ニュース

平成 30 年 12 月 1 日
東北大学加齢医学研究所
研究会同窓会発行

【所長室便り】

川 島 隆 太

今年の夏も猛暑に豪雨，台風に地震と大荒れでした。特に夏の猛暑は健康管理に気を使われたのではないかと存じます。同窓会の皆さまにおかれましては，おかわりはございませんでしたでしょうか。所長室便りを書いている現在は，窓の外にはさわやかな秋模様が広がっていますが，これからはこのような穏やかな日々が続けばと祈っております。

さて，本学では，大野総長を中心とした新執行部体制のもと，東北大学ビジョン 2030 が策定されました。今後，このビジョンの実現に向けて，大学として総力を結集することになります。同ビジョンの策定には，将来，本学の運営を担うであろう若手教員が中心となって作業を進めてきました。加齢研からは，田中教授がビジョン策定に参画されています。

同ビジョンは，「2030 年に向けた東北大学のあるべき姿・ありたい姿（ビジョン）」と，その

実現を目指した中長期の方針（重点戦略），さらには，具体的なアクション（主要施策）等を提示するものです」とされています。大きなポイントは，本学の建学以来の理念である「研究第一」，「門戸開放」，「実学尊重」を堅持しつつ，社会との共創（Co-Creation）を核に，教育，研究，経営革新を推進していく点です。「卓越した知を基盤とする社会価値創造」「未来社会へむけた変革・イノベーション」がキーワードになります。東北大学ビジョン 2030 の，詳しい内容は大学ホームページで公開されますので，ぜひご覧ください。

時代の要請といえはそれまでですが，本学の将来構想でも，社会実装を含む社会との連携が強く意識されています。文科省の新方針では，産学連携等の外部資金を取れない大学の運営費交付金が減額されるとのこと。国立大学協会も，高等教育における国立大学の将来像の 3 本の柱のひとつに，産学官連携による共同研究推進を挙げています。稼ぐ力のない大学法人を淘汰しようとしているように感じます。基礎的研究を

加齢研ニュース 第 70 号 目次

所長室便り（川島 隆太）	1
分野紹介（認知機能発達寄附研究部門）	3
随想（伊藤 剛）	5
研究会便り（家村 顕自）	6
所内人事消息	9
研究会同窓会広報（高井 俊行）	10
編集後記	11

コツコツと積み上げている研究者にはつらい時代になりそうです。我が国の国立大学教員の研究に対するノーベル賞受賞がまったくなくなる日もそう遠くはないように思えてきます。

私は、研究者個人が自分自身の興味と信念に基づいて行うボトムアップ型の研究こそが、大学の研究力の源泉であり、大学の宝であると信じています。新ビジョンの元でも、所長として、加齢研で個々の研究者が自分自身の基礎研究に没頭できる環境はしっかりと守りつつ、対外的にはプロジェクト型の研究を推進し社会連携を先導しているように上手に化粧をして見せる、そのようなかじ取りを心がけたいと思っています。

ちなみに国立大学協会があげる将来像のカギとなる他の2本の柱は、ガバナンス改革と人事給与改革です。

ガバナンス改革では、国立大学法人の経営統合が大きなテーマになっています。名古屋大学と岐阜大学の経営統合はニュースにもなりましたので、ご存じの方も多かもしれません。そのほかにも、「北見工業大学・小樽商科大学・帯広畜産大学」、「静岡大学・浜松医科大学」、「奈良教育大学・奈良女子大学」などが自治体や民間企業を巻き込んだ経営統合を模索しています。

人事給与改革では、本学の将来構想の中では、シニア教員の流動性向上という言葉がでてきます。本学は、指定国立大学として、若手教員の割合を増やすことをKPIに入れています。ベテラン教員が自ら大学を去りたくなるような仕組みを作る気ではないかと、首筋が寒くなる思いをしています。高齢期においても前を向き、胸を張っていきいきと社会生活を営み続けることができるスマート・エイジングの具現化を標榜している我々にとって、若手研究者の育成が大切なことはもちろんよく理解できますが、

お金がないからベテランは退場しろというのは乱暴すぎて飲めない話ですので、動向を注視していきたいと思います。

産学官共同研究の推進とともに、3本の柱はともに、運営費交付金の中でも人件費を含む基盤的経費の削減が今後も続くことを見越しての経営改革のみが念頭にあるようです。各国立大学法人が生き残りをかけたサバイバルレースを始めたように感じています。

当然のことですが、経営資源（運営費交付金における基盤経費）が縮小していくなか、生き残りをかけたサバイバルレースは大学法人間だけでなく、法人内でも始まっています。国立大学法人東北大学の中で、加齢医学研究所がどのような生き残りの戦略をたて実行しなくてはいけないのか、正面から真剣に考えなくてはけません。

ここで加齢研の生き残り戦略を、比較的長いスパンで考えるために、教員人件費の推移から見える加齢研の未来予想をしてみたいと思います。私たちに配分される教員人件費は、年々削減されています。この削減率を効率化係数と呼びます。何をどう「効率化」したいのか、文科省の意図を深読みするとなんとも暗くなります。附置研究所は全教員の人件費について1.6%の効率化係数がかかり続けています。

現在、加齢研では、教員人件費により運営されている分野は16分野になります（プロジェクト研究分野を除く）。現在の東北大学ビジョンの終着点である2030年、加齢研は満89歳になりますが、人件費上からは、現在の分野構成を維持しようとする13分野になります。2041年、加齢研100周年の記念行事は、11分野の教授たちが行うことになるでしょう。そして150年後の2168年、私の計算では、加齢研には分野が一つ残るだけになります。このまま

教員人件費に効率化係数がかかり続け、何もせず手をこまねていけば、学内でも、早晚、部局間の「経営統合」は避けられないことは自明です。経営統合というと聞こえは良いですが、小さい部局は、大きな部局に吸収合併されるだけの話です。

所長としては、少なくとも我々が「ゆでガエル」になることだけは避けたいと考えています。大学執行部には、今後の加齢研を含む附置研究所のあり方をどう考えているのか、しっかり方針を示してほしいと何度も強く申し入れてあります。短期的には、自助努力として、大型の産学連携研究を獲得し、クロスアポイントメント等を活用して、教員人件費を少しでも浮かせることを企てています。150年先の未来までは当然責任は持てませんが、少なくとも2030年まで加齢研が輝き続けられるよう、残り1年と少しの任期ですが、大学本部の方針をにらみつつ、打てる手は積極的に打っていきたいと思っています。

さて、最後になりますが、同窓会の皆さまは、「加齢医学研究所 スマート・エイジング基金」をご存じでしょうか。本学では、持続的発展のための安定的な財源確保を目的とする「東北大学を支援する基金」と、寄附者様のご意向を尊重して大学運営に反映させていただく「特定のプロジェクトを支援する基金」を設立し、企業・団体や個人の皆様など多くの方々にご支援をお願いしています。

<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kikin/japanese/support/index.html>

この特定プロジェクトのひとつに、加齢研における研究・教育プログラム整備、超高齢化社会における新たな加齢医学分野を開拓し世界をリードする研究拠点の構築等の事業を支援することを目的とした「加齢医学研究所 スマート・

エイジング基金」があります。平成29年度は910万円のご寄付をいただくことができました。

この基金は、加齢研における研究環境の充実（特に老朽化した共用研究機器の更新）や、赤字化することが予想される人件費などに活用していくつもりです。免税措置もごございますので、是非ともご支援を賜りたくお願い申し上げます。

【分野紹介】

認知機能発達寄附研究部門

〈沿革〉

認知機能発達寄附研究部門は公文教育研究会の寄附により2008年4月1日に発足しました。磁気共鳴画像（MRI）を用いた脳構造・機能画像の縦断データや、認知機能、生活習慣、遺伝子データなどから、子どもの成長や発達の神経基盤を検討することが発足当時から大きなミッションであり、これまでのべ千人を超える子どもの脳画像データを取得しています。現在は教授川島隆太、准教授竹内光、助教橋本照男、松崎泰、受託研究員沖本恵子の5名を中心に運営しています。

〈研究内容〉

1. 小児の脳発達研究

当部門では子どもの脳が年齢ともにどのように変化していくのか、その変化に遺伝や環境要因、認知機能はどう影響するのか、を明らかにすることが大きなリサーチクエストとなっています。

近年の研究をご紹介します。Takeuchi et al. (2016) ではテレビゲーム時間と子どもの脳構造、特に白質における水分子の拡散性（組織が疎らである程度）との関係を横断・縦断データの双方を用いて明らかにしました。横断データから、テレビゲームの時間が長い子どもは左右

の半球を繋ぐ連合繊維である脳梁を中心に幅広い範囲で水分子の拡散性が高いことが示されました。加えて縦断データから、テレビゲームの時間が長かった子どもは約3年後においても、白質における水分子の拡散性の高さが幅広い範囲で確認されました。また広い領域で白質における水分子の拡散性の高さと、知能指数の低下についても関連が示されました。これらの結果から、テレビゲームをやりすぎると脳構造の白質統合性の低下につながり、子どもの認知機能の発達にも悪影響を及ぼし得ることが示唆されました。

2014年からは健常児のみでなく、社会的コミュニケーションなどの側面において非定型的な発達をみせる自閉スペクトラム症児にも焦点をあて、データを取得しています。

2. 成人の大規模脳画像研究

小児だけでなく成人を対象とした研究も行われています。成人の大規模サンプルを用い遺伝子多型と、脳機能や構造、また質問紙などの心理行動指標との関係について検討や、介入による脳の可塑性についての研究が行われています。

例えば Takeuchi et al. (2018) では、特定のカルシウムチャンネルの発現にかかわる遺伝子であり、統合失調症や双極性障害などの関連が指摘される *CACNA1C* 遺伝子の型によって、女性の脳活動に特異的な影響が現れることを示しました。脳活動への影響は男性には出現せず、加えて特定の認知課題中だけではなく、安静時においても脳活動の変化が生じていました。この研究は、他の心理指標の結果も含め *CACNA1C* 遺伝子の多型が、精神疾患のリスク要因になりうることを脳活動の観点から示しました。

介入による脳の可塑性に関して、Takeuchi et al. (2017) では成人を対象としワーキングメモ

リー (WM) トレーニングの効果について報告しています。WM とは、覚えた内容を保持しつつ、情報を更新するといった操作を行う記憶の働きです。例えば 1, 2, 9, 5 という数字を聞いて、これを逆の順番で唱えることができるのは WM の働きです。

この研究では、特に安静時の脳活動に着目して効果を報告しています。4 週間の WM トレーニングを行った群において、様々な脳領域のハブ的機能を有する前頭前野内側部や前帯状皮質における安静時脳活動が上昇するといった変化がみられました。このことから、比較的短期間の WM トレーニングであっても情報処理を効率化することが示されました。

3. 児童生徒の学力や生活習慣に関する解析

子どもの学力と、その基盤となる学習意欲や生活習慣などの要因との関連を明らかにするための活動にも取り組んでいます。仙台市学習意欲の科学的解明に関するプロジェクトに関わり、毎年数万人の児童生徒の学力・学習意欲、生活習慣のデータ解析をしています。近年は子どものスマートフォン使用と学力との関連についての発信を行っています。また、読み聞かせや親子での調理といった幼児の発達に寄与する家庭での習慣と、親子の脳活動や愛着形成についての研究も行っています。

Takeuchi, H., Taki, Y., Hashizume, H et al. (2016). Impact of videogame play on the brain's microstructural properties : cross-sectional and longitudinal analysis. *Molecular Psychiatry*, 21, 1781-1789. DOI: 10.1038/mp.2015.193

Takeuchi, H. Tomita, H., Taki, Y et al. (2018). A common *CACNA1C* gene risk variant has sex-dependent effects on behavioral traits and brain functional activity. *Cerebral Cortex*, 1-9. DOI: 10.1093/cercor/bhy189

Takeuchi, H., Taki, Y., Nouchi, R. et al. (2017).

Neural plasticity in amplitude of low frequency fluctuation, cortical hub construction, regional homogeneity resulting from working memory training. *Scientific Reports*. 7, 1470. DOI: 10.1038/s41598-017-01460-6.

(文責: 松崎 泰)

【随 想】

Catch me if you can.

秋田大学大学院医学系研究科
医学専攻 分子生化学講座
伊 藤 剛

山口大学にて祐村恵彦教授のもと細胞性粘菌を研究材料として細胞質分裂について研究、博士号を取得、ポスドクとしての活躍の場を探索。最初は某所のポスドク公募に応募もポスト決定済みとお返事。しかしながらの転機、加齢医学研究所の田中耕三先生（現：分子腫瘍学研究所分野教授）がポスドクを探しているとの情報をゲット。縁に惹かれて書類を送付。その後面談、採用とトントン拍子に進み、さあいよいよ研究と意気揚々と仙台へ。

2008年初夏、染色体分配に働く分子を探すことを目標とした研究を加齢研にて開始。半年間、アタリ分子の影を踏むことなく、意気消沈。そんな時、ようやく見つけた候補分子（遺伝子座 C13orf8）。新規分子のため命名権ゲット。この分子を CAMP と命名。ちなみに CAMP は Chromosome Alignment Maintaining Phosphoprotein の頭文字。CAMP のノックダウンにより染色体分配が大きく乱れる様子に感涙。その後も、悲喜こもごもありながら 2011 年初旬に研究報告。CAMP 発見のよもやま話、ご拝読いただけますでしょうか。駄文についてはご容赦を。

当時の研究室メンバーは田中先生、原田葵枝

術補佐員、私、以上 3 名でした。いきなり研究室のエース級であり、始まりの期待と使命感に満ちておりました。徐々に打ち碎かれるのですが……。研究課題は染色体分配に働く分子の同定とその機能解析、できれば細胞内構造に局在が認められるようなチョット恰好良い分子がいい。方法としましては染色体分配に働く重要分子に結合する分子を探索、見つけた分子をノックダウン、染色体分配に異常の認められた分子がアタリです。まず重要分子を細胞内にて発現させるのですが、そのための発現ベクター作成の失敗が続きました。ライゲーションがどうにもうまくいきません。発現ベクターがようやく出来て細胞内での発現をウエスタンブロットで検出するにもバンドが出ない。いわゆる典型的なドツボですが、このピンチは安井明教授と菅野新一郎先生に救っていただきました。先生方の指南のおかげで、実験はスムーズに進むようになりました。しかしながら、研究対象となるような分子は見つかりません。

12 月。7 月からスタートした分子探しにより目途がつかしました。候補分子についてのノックダウンを試したときは半ば諦めモードで実施していました。ところが結果を見て、眩暈のするほどの衝撃が……。通常、分裂中期に全ての染色体は分裂面に対して一直線に並ぶ（整列）のですが、この分子をノックダウンした細胞では一旦、染色体は整列するものの次第に分散していくユニークな様子が観察されました。こうして、C13orf8 こと CAMP の特定に成功しました（新規分子だったことは本当に幸運でした）。子供のころ新しい天体の発見者は名前をつけられる話を知り、夜空を見上げながらラッキーな人もいるもののだと思ったものですが、将来自分に近似な発見の喜びがもたらされるとは露ほどにも思いませんでした。その後いろいろな苦難を乗り越えて、論文アクセプトの日を迎えました。その朗報は田中先生より伺いまし

たが、その瞬間をよく覚えています。クリーンベンチにて細胞培養を行っていたところ田中先生よりすぐ終わる？と声をかけられ、もう少しですと応答。作業中、先生はずっと後ろにいらっしゃいました。何かやらかしたのかと緊張のまま作業をつづけて終わりましたといったところで笑顔での握手を求められました。

この研究成果により加齢医学研究所研究奨励賞を授与することができました。当時、福田寛所長より酒代にといただいた副賞は家庭への課金となり、子供達の家具代へと消えました。その後ポスドクから助教へと昇任し、通算6年間、加齢研にてお世話になりました。突然その日はやってきまして、田中先生より、伊藤さんは将来どうするの？と尋ねられまして組織内での細胞分裂に興味ありますと回答したところ、すぐ行動と背中を押していただきました。その後、研究が進まないときに足取り重く歩いた、あの田中研廊下：通称 The Green Mile（意味は実際歩いてみればお分かりになるかも）ともしばしのお別れとなりました。

CAMPは学習障害の原因遺伝子の候補として注目されています。この他にもまだまだ未知の役割が隠れている可能性があり、分子腫瘍学研究分野でも目下研究中と伺っております。自分事の近況としましては、秋田大学大学院医学研究科・医学専攻・分子生化学講座（田中正光教授）に異動して、新たな研究課題をスタートさせて5年目となります。加齢研で磨いていただいた研究者魂を糧に日々邁進しております。学会にて加齢研の先生方とお会いする機会もありまして、お声をかけていただけたときは嬉しく思います。研究の進捗状況は良い感じかと。内容は組織内における細胞分裂と間質細胞との関連です。

ちなみに、分子腫瘍学研究分野との共同研究にて加齢研に再びお世話になっております。末永くどうぞよろしく願いいたします。

【研究員会便り】

研究員会委員長 家村 顕 自

平成30年1月から委員長を務めております、分子腫瘍学研究分野の家村顕自です。研究員会は、加齢研の若手研究者を主体として、研究所内外の垣根を越えた人的交流を促し、研究を活性化する環境づくりを行っています。

晩秋にむけて、交流セミナー、リトリート、スポーツ大会と研究員会主催の大型イベントが続きましたがご参加いただけましたでしょうか？毎回、少しずつブラッシュアップしながら開催しておりますので、ご参加いただけました先生におかれましては、フィードバック等いただけますと幸いです。他の研究分野と密に接することができる機会かと思っておりますので、是非積極的に活用していただき、所内連携や所内共同研究発足の足がかりとしていただければと思っております。

研究員会活動内容（H30.6～H30.11まで）

＜若手研究者アンサンブルワークショップ＞

日時：平成30年7月4日（水）

場所：東北大学電気通信研究所 本館6F大会議室、1F エントランスホール

参加費：無料

懇親会参加費：3,000円（学生2,000円）

若手研究者アンサンブルプロジェクトの活動の一環として若手研究者アンサンブルワークショップについて開催案内を行ないました。（平成30年度研究所若手研究者アンサンブルプロジェクトWG 加齢研委員 大場健太郎先生）

＜第5回加齢研リトリート＞

日時：平成30年11月6日（火）-7日（水）

場所：南三陸研修センター まなびの里いりやど

幹事：生体防御学分野 伊藤甲雄先生

第5回となる今回は、第1期3年間に行なったリトリートをさらに発展させ、分野間の垣根を取り除いて、加齢医学研究所をより活性化できるリトリートを目指しました。また、本年度は昨年度から立ち上がったリトリートと連携した若手共同研究促進助成金の昨年度助成対象者の中間報告ならびに本年度申請者の一次審査を行いました。これまでのリトリートで培った共同研究及び、これから始める研究も助成対象です。

発表について：以下の枠による発表・ディスカッションを行いました。

- ① 平成29年度若手共同研究促進助成金助成対象者による中間報告
- ② 平成30年度若手共同研究促進助成金助成申請代表者によるプレゼンテーション
- ③ 口頭発表（一般）：分野間の理解を深め、また共同研究に発展しうるシーズを開拓するため、参加者による自由な口頭発表。
- ④ ポスター発表（一般）

<加齢研研究員会スポーツ大会>

日時：平成30年11月15日（木）-16日（金）

場所：星陵体育館

学生による実行委員会で運営を行います。1日目、個人種目（卓球、バドミントン）。2日目、団体種目（バレーボール、バスケットボール）

<加齢研研究員会セミナー>

・研究員会セミナーとは

外部の先生を招聘する際に、研究員会における学術審査を通して、最大謝金助成2万円、旅費助成3万円を支給します。申請は加齢研所属の研究員会員ならどなたでも可能ですので、是非ご利用ください。

過去のセミナーや今後の実施予定は以下のURLに掲載：

<http://www.idac.tohoku.ac.jp/site/news-events/events/>

http://www.idac.tohoku.ac.jp/site_ja/news-events/events/

日時：平成30年5月26日（土）

午後3時15分～午後5時10分

場所：加齢研プロジェクト棟1階 中会議室

演題：1. 心臓血管形成におけるHeyファミリー転写因子の発現と機能、2. 心房の左右性と心房中隔形成、3. Cellular and molecular machinery for brain compartment boundary formation、4. 生体機械融合型ロボットをめざして、5.6. バイオサイエンスに貢献するマイクロロボティクス

講師：1. 渡邊裕介先生、2. 小柴和子先生、3. 井上高良先生、4. 清水正宏先生、5. 新井健生先生、6. 小嶋勝先生

所属：1. 国立循環器病研究センター研究所、2. 東洋大学 生命科学部応用生物科学科、3. 国立精神・神経医療研究センター神経研究所、4. 大阪大学 基礎工学研究科、5. 電気通信大学 グローバル・アライアンス・ラボ推進室、北京理工大学 (BIT) 知能ロボット研究センター、6. 大阪大学 基礎工学研究科

担当：久保純先生（所属：神経機能情報研究分野・内線8596）

日時：平成30年11月27日（火）

午前11時～

場所：加齢研スマート・エイジング国際センター1階 国際会議室

演題：メンデルの法則に反する染色体分配

講師：明楽隆志先生

所属：ペンシルベニア大学

担当：家村顕自先生（所属：分子腫瘍学研究分野・内線8490）

＜平成30年度加齢研交流セミナー＞

・交流セミナーとは：

平成22年度から研究員会の主催で実施されていた「加齢研生化学セミナー」から、平成29年度より「加齢研交流セミナー」と名称が変更となりました。内容は今まで通り、加齢研内の研究室間交流セミナーです。年4回、毎回2研究室ごとに発表者を選出して頂き、30分の持ち時間で研究発表・討論を行うという形式で開催しています。加齢研の他研究室の研究を知る非常にいい機会となりますので、皆様ふるってご参加ください

発表登録研究室（H30年3月現在）：

遺伝子導入分野、遺伝子発現制御分野、医用細胞資源センター、応用脳科学分野、基礎加齢分野、生体防御学分野、腫瘍生物学分野、腫瘍循環分野、神経機能情報分野、人間脳科学研究分野（脳機能開発分野）、分子腫瘍学研究分野

*セミナーの聴講は上記の分野に限らず、加齢研所属のどなたでも可能です。

*発表研究室の追加は随時受け付けます。

連絡先：齋藤（研究員会事務局・内線 8576）

第1回 加齢研交流セミナー

日時：平成30年6月14日（木）

16:00-17:10

会場：加齢研実験研究棟7階セミナー室1

1. 徹底討論：高齢者の生活力を向上させる認知トレーニングの効果

講師：スマート・エイジング学際重点研究センター/応用脳科学研究分野
野内 類先生

2. 次世代シークエンサーを用いた免疫受容体解析とその応用

講師：生体防御学分野 小笠原康悦先生

第2回 加齢研交流セミナー

日時：平成30年10月4日（木）

16:00-17:10

会場：加齢研実験研究棟7階セミナー室1

1. Vasohibin-2 とがんとの深遠なる関係
講師：腫瘍循環研究分野 佐藤靖史先生
2. 分裂期染色体ダイナミクスを介した染色体を正しく分配するしくみ—分裂期染色体は何のために動くのか?—

講師：分子腫瘍学研究分野 家村顕自先生

第3回 加齢研交流セミナー

日時：平成29年12月6日（木）

16:00-17:10

会場：加齢研実験研究棟7階セミナー室1

1. タイトル未定

講師：人間脳科学研究分野
大場健太郎先生

2. タイトル未定

講師：神経機能情報研究分野
小椋利彦先生

＜今後の予定＞

1. 第151回集談会（H31.1.25）での研究員会第34回発表コンテスト

2. 研究員会主催新年会

日時：平成31年1月25日（金）

第151回集談会終了後

昨年度と同様にポットラック形式で行なう予定です。

3. 第4回加齢研交流セミナー（日程未定）

4. 加齢研研究員会セミナー

加齢研研究員会主催 佐藤靖史教授退職記念講演

日時：平成31年3月15日（金）16時～17時

場所：加齢医学研究所 スマート・エイジング棟1階 国際会議室

講師：佐藤靖史先生

所属：腫瘍循環研究分野

演題：加齢医学研究所での研究生活を振り返る

連絡先：飯田理恵先生（所属：腫瘍循環研究分野・内線 8532）

【研究会同窓会広報】

庶務幹事 高井俊行

庶務報告

- 研究会同窓会会員の確認（平成30年11月現在）

会員数 1,994名

（所内在籍者206名，所外777名（過去5年間の会費未納者は、276名で加齢研ニュースは送付しておりません。）海外93名，退会者465名，物故者279名，住所不明174名）

賛助会員 26施設

購読会員 17件

物故会員（平成30年6月～平成30年11月までの間に事務局に連絡がありました。）

森 昌造先生 平成28年6月15日
抗研外科

井上 正広先生 平成30年8月28日
加齢研臨床腫瘍学

横山 正和先生 平成30年9月1日
抗研臨床癌化学療法

梶塚 暁先生 平成30年10月27日
抗研外科

- 第150回集談会

日時：平成30年7月20日（金）午後1時から

場所：加齢医学研究所 スマート・エイジング研究棟 国際会議室

一般口演9題

- 平成30年度加齢医学研究所研究会同窓会総会，懇親会（園遊会）

日時：平成30年7月20日（金）

総会 集談会終了後

懇親会（園遊会） 加齢医学研究所 スマート・エイジング研究棟 1階ホール

午後5時30分から

- 加齢研セミナー（平成30年6月16日～平成30年11月1日の間に開催されました。）

平成30年6月21日（木）18:30～19:30

加齢研 SA 研究棟 1階国際会議室

講師：荒井秀典

所属：国立長寿医療研究センター 病院長

演題：高齢者医療の将来展望を考える

担当：基礎加齢研究分野 堀内久徳

平成30年7月12日（木）16:00～

加齢研実験研究棟 7階 セミナー室 1

講師：栄川 健

所属：ワシントン大学

演題：Lymphocyte Proliferation in protective immunity and oncogenesis

担当：医用細胞資源センター 松居靖久

平成30年7月12日（木）17:30～18:30

加齢研 SA 研究棟 4階 機能画像医学セミナー室

講師：阪本真弥

所属：東北大学病院 歯科診療部門 口腔診断科

演題：高齢者を診るときに役立つお口の話

担当：機能画像医学研究分野 瀧 靖之

平成30年7月26日（木）10:30～

加齢医学研究所 スマートエイジング研究棟 2階 セミナー室

講師：1. Jiun-Jie Wang

2. Yea-Ing Lotus Shyu

所属：1. Department of Medical Imaging and Radiological Sciences, Chang Gung University, Taiwan

2. School of Nursing, Chang Gung

University, Taiwan

- 演題：1. Diagnosis and Prognosis of neurodegenerative disease by using diffusion MRI
2. Care Models for Older Persons with Hip Fracture : Randomized Clinical Trials

担当：応用脳科学研究分野 川島隆太

平成30年8月6日(月) 17:00~18:30

加齢研実験研究棟 7階 セミナー室 1

講師：Jeffrey Rathmell

所属：Vanderbilt University School of Medicine

演題：Fueling T Cells in Inflammation and Cancer

担当：遺伝子発現制御分野 本橋ほづみ

平成30年8月21日(火) 17:00~18:30

加齢研実験研究棟 7階 セミナー室 1

講師：曾我 朋義

所属：慶應義塾大学先端生命科学研究所

演題：マルチオミクスによるがんの代謝制御機構の解明

担当：遺伝子発現制御分野 本橋ほづみ

平成30年9月28日(金) 17:00~18:30

加齢研実験研究棟 7階 セミナー室 1

講師：Albert van der Vlie

所属：The University of Vermont

演題：Redox Regulation of Protein Tyrosine Kinases in Lung Health and Disease

担当：遺伝子発現制御分野 本橋ほづみ

5. 加齢研ニュース発行

69号 平成30年 6月

70号 平成30年 12月

今後の予定

1. 第151回集談会

日時：平成31年1月25日(金) 午後1時から

場所：加齢医学研究所 スマート・エイジング研究棟 国際会議室

第26回加齢医学研究所研究奨励賞，一般口演

2. 第152回集談会

日時：2019年7月19日(金) 午後1時から

場所：加齢医学研究所 スマート・エイジング研究棟 国際会議室

一般口演

3. 2019年度加齢医学研究所研究会同窓会総会，懇親会(園遊会)

日時：2019年7月19日(金)

総会 集談会終了後

懇親会(園遊会) 加齢医学研究所 スマート・エイジング研究棟 1階ホール 午後5時30分から

4. 加齢研ニュース発行

71号 2019年 6月

72号 2019年 12月

[編集後記]

最近衝撃を受けたこと。新約聖書最終章ヨハネの黙示録の謎の文章は、もともとの文章に後から全く別の趣旨の文章が加筆されたのが原因との田川建三氏の新説(2017年)に触れる。信者ではないが中高一貫のクリスチャン校だったので、なぜ聖書の時間に黙示録が取り上げられないか不思議だったが、納得できる説明。新説の真偽は専門家の議論を待つとして、認められたら超弩級の「事件」。タブーを恐れずに原典から緻密な論証を積み上げる姿勢には、自然科学者としても背筋が伸びる思い。

(杉浦 元亮)